

工師テレユケ棒呈淀川右岸低地惡水排除計畫上申及ヒ
報告書譯文

淀川右岸低地惡水疏決法之義ニ付上申

但シ圖面第一第二第三号添

既ニ一年余前ニ我ハ大阪築港計畫ヲ成了セリ其計畫ニ
ハ淀川下流ニ必要ナル河川工事ニシテ區域頗ル大ナル
モノヲ附帶セシメタリ

該計畫ハ尙ホ又タ島下幹大惡水路ヲ改修シテ味舌濱ニ
至ルノ計畫ヲモ包括セシナリ其趣向ヲ以テスレハ則チ
吹田以下卽チ以西ノ卑地ノ惡水ヲ十分ニ放決スルノミ
ナラス安威川左岸ノ決水上ニモ大ナル改良ヲ與フルモ
ノトセリ

其後大阪府ニ於テ淀川右岸ノ卑地ハ番田村ニ至ルマテ

悉皆ノモノヲ圖シ且ツ地面ノ高低ヲ測量セリ而シシ其
地悉皆ノ決水ニ改良ヲ得セシムルノ方法アリヤ否ヲ確
知セン爲我ニ其圖面ヲ送レリ
該測量ノ成績ニ據テ見ル所ノ者ハ此ノ地誠ニ惡水ヲ極
ムルヲ是ナリ然ルモ斯ク其田野收穫上損害患難ノ大ナ
ル主ニ安威川ノ位置ニ憑ルモノト云フハ今茲ニ謹テ
棒呈スル所ノ報告書ト計畫圖ヲ觀テ以テ將ニ判然セン
トス更ニ又安威川下流轉換工事ヲ以テセハ此邊各地ノ
惡水ハ淀川ノ高水ニ起因シテ吹田邊ニ高水アル時ヲ除
キ常ニ決疏十分ナルモノトナラント云フモ判然ナラ
ントス其安威川下流轉換工事ハ敢テ難事トスヘキ程ノ
モノニアラス
過ル明治十八年中ニ來セシ如キ甚タシキ高水アラハ猶

ホ危險ナル川狀アルニモ拘ラス淀川下流改修工ニハ千
今着手アラス是レ或ハ今一段延引ノ姿ニ附スルコトモ
アラシカ然ルニテモ前陳島下幹大惡水路改修工ハ他ノ
工事ヲ待タスシテ先ツ施行スヘク或ハ今提出ノ諸工事
ト全時ニ施行スヘキモノナリ
以上敬具

千八百八十九年即明治廿二年二月廿三日於東京

雇工師

ヨハチス、デ、レ、ー、ケ

土木局長西村捨三殿

内務属宮原直堯譯

淀川右岸卑湿地惡水疏決法

第壹章 測量

茲ニ將ニ陳述セントスル所ノモノハ淀川右岸沿岸番田
村ヨリ味舌濱ニ至ルノ卑湿地要水疏決改良ノ計畫ナリ
此計畫ニ必要ナル測量ハ大阪府員岩佐政吉氏ノ手ニ成
リタルモノニテ左記ノ圖類皆是レナリ

第一 地所ヲ顯ハス縮尺三千分一ノ圖一通

第二 諸川及幹大惡水路中時日異リタル水位高低ヲ
示ス所ノ縱斷面圖一通

第三 橫斷面圖一通

第四 四拾九ヶ所ノ樋門及ヒ潛溝樋並ニ三十七ヶ所
ノ用水引入口ノ尺度及ヒ「オ、ピイ」水位
上ノ高サヲ記載スル圖本一冊

天保山沖最低
于潮水面

第五

安威川及ヒ茨木川横断面圖一組是レハ昨年十月
二月中ニ落手シタルモノニシテ其中ニハ從來
最高水トシテ知ラレタル兩川ノ水位ヲ記載セ
リ

該測量中最肝要ナルモノハ高低測量ナルヲ論ヲ待タス
是レ畢竟斯ノ決水計畫ハ終始之ニ基ツク所ノモノナレ
ハナリ而シテ高低試測ニ係ルノ野帳ハ一モ送り來ラス
ト雖モ岩佐氏ハ頗ル謹密ノ測量家ナルヲ知ルヨリシテ
深ク氏ニ信ヲ置ク故ニ氏ノ測量ヲ正確ト見做スモ一ノ
危険ダニ無カルヘシト信ス

第二章

現今不良ノ狀

高槻以西ノ卑地ハ皆其惡水ヲ放決スルニ吹田ノ上ニ於
ケル神崎川ヲ以テス該所ノ水位ハ淀川幹流ノモノヨリ

モ數尺卑キニ居ルモノナリ然リト雖モ諸方ノ惡水路ニ
ハ高キ平地ノ水及鉄道線路ニ臨ンテ連亘スル丘阜ノ水
ヲ滯エルノ甚シキカ故ニ現時ノ狀態ヲ以テスレハ此ノ
地方大半ハ屢々溢水ニ浸サレ或ハ汎濫ノ狀ヲ呈ス稲田
少ク算スルモ貳千五百町歩ハ斯ル水害ナクハ最上田ナ
ラントスルモ漸々其地價ノ半乃至半余ヲ落シタリ此地
惡水路モ縱横ノ溝洫モ潛溝樋モ近キ二百年間ニ設ケタ
ルモノ夥多アリテ猶且然ルナリ傳聞スル所ニ據レハ若
シ此卑濕田野ノ惡水ヲ十分ニ放疏シ得ハ其價ハ一町毎
ニ今ノ二倍以上ニ騰貴スヘシ故ニ地價増加ノ合計ハ幾
ント壹百万圓ナラント云フ

第三章

河川改修計畫(曩ニ提出ノ分)

千八百八十七年

明治
廿年

十二月調整ノ淀川下流改修計畫ニハ

味舌濱ノ潜溝樋ヨリ菰江ニ至ル迄距離凡二里十三丁ノ
間神崎川ニ沿フテ開カントスル幹大悪水渠ノ工事ヲ附
シタリ其新渠ノ過半部ハ現在ノ渠溝ヲ經過スヘキモノ
トセリ唯々該渠溝ハ一段深ク且ツ廣キモノトナスヘキ
ノミ
斯ク新渠ヲ設クルニ於テハ潜溝樋(第二十六号及二十七、
二十八号ノ)邊低水位ノ卑下スルヲ貳尺四寸ニテ高水位
モ卑下ニ趣クノ度ハ低水ニ於ケルヨリモ尙多キヲアル
ヘシトス若シ又タ該潜溝樋ニ導達スル所ノ三箇ノ牧及
ヒ鳥飼組ノ如キ惡水路ヲ少許深クセハ則チ安威川淀川
間ノ全地面ニ除害ノ効ヲ及ホスヲ大ナルヘシ
淀川下流改修計畫ニハ又タ該新渠開設ノ爲メニ吹田ノ
上下神崎川沿岸ノ低地ノ如キモ十分ニ惡水排除ノ効ヲ

奏スヘシト云フヲ表明ス

第四章

更ニ改修工擴張ノ必用

既ニ前章ニ謂フカ如クナリト雖^モ該新渠ヨリ水上ニ於
ケル番田村味舌下村間ノ低地中多クハ猶改修ノ利益ヲ
享ケサルヘシ

安威川左岸ニ在テモ悉皆ノ田地ニ除害ノ効ヲ覺エシム
ルヲ能ハス何トナレハ彼ノ潜溝樋ヨリ上三箇ノ牧及ヒ
鳥飼ノ惡水路ハ猶出水ノ時川水浸入ノ難ヲ冒スカ故ニ
出水中現今ノ如ク第貳十三、二十四、二十五号ノ樋門閉鎖
ヲ要スルカ故ナリ

彼ノ芥川ノ底ヲ潜通スル所ノ陰溝ニ由リ惡水ヲ番田川
ニ決スル番田村ノ平地其他番田川右測ノ卑地悉皆ノモ
ノハ又前述ノ新渠開鑿ヲ以テ少許ノ改良ヲモ感セサル

ヘシ

然リト雖此ノ地方悉皆ノモノニ惡水排除ノ利ヲ得セ
シムルヲモ成シ得ヘキナリ其之ヲ成サントスルニハ該
新渠工事ノ外ニ尙他ノ工事ヲ要ス是レ則チ此ノ計畫書
ニ記載スル所ノモノナリ

第五章

丘阜ヨリ出ル川流

吹田山崎間ニ淀川ノ小支流數條アリ皆川右ニ連立スル
丘阜ヨリ出テ京阪間鐵道線路ヲ横截ス就中最東ニアリ
テ一直淀川ニ落ツルモノハ芥川ナリ
次ナル支流ハ安威川ナリ其水源茨木村ノ上方丘阜ノ間
ヨリ發ス夫ヨリ直行斜地ヲ流下シテ淀川ニ近ツクト雖
モ深合セスシテ路ヲ轉ス其故他ナシ己ニ平地ニ達シタ
ル安威川ノ底及水面ハ淀川ノ底及水面ヨリモ低クケレ

ハナリ

安威川ノ線路ハ長凡五里アリ之ヲ別チ二區トナスヲ得
一ハ野々宮迄ノ上區一ハ夫ヨリ下流即チ下區ナリ其未
味舌下村ニ於テ舊神崎川ニ合流ス

野々宮ヨリ上流若干丁ノ安威川ハ高堤ヲ有シ每一里ニ
テ一丈三尺余ノ落差アリ下區ノ長サハ四拾丁余アリテ
其落差ハ每一里ニテ三尺以下ナリ(水底ハ幾ント傾下無

シ)然ルカ故ニ其川内上區ハ狹ク下區ハ廣シ大阪府管内圖ハ正
シキモノトナスヘ
カラサルハ万々ノ事ナレモ仮リニ之ニ據リテ安威川茨木川ノ流域ニ
係ル山地面積ノ合計ヲ算スレハ凡ソ二十五平方英里アルモノ、如シ

○茨木川

此ノ川モ同シク茨木村ノ上方丘阜ヨリ流出ス而シテ野
々宮以上ノ安威川ト其狀態ヲ同ス唯タ稍ヤ少ナルノ差
アルノミ其川尾ハ鶴野村ニ於ケル安威川ノ下區即チ野

々宮ヨリ二十八丁ヲ距ルノ下流ニ合ス

○淺川及防量川

此ノ二川ハ較ヤ小流ニシテ鉄道ノ北丘阜ノ麓ヨリ傾下
スル地面中一部分ノ水ヲ受領シ兩ナカラ茨木川ト同一
所ニ於テ安威川ノ下區ニ落ツ

其他尙ホ彼ノ丘阜ヨリ出テ安威川ノ下區ニ落ツルモノ

ハ山田川ノ一流アリ

前段ノ三小流ヲ合スルモ其容量ハ茨木川ニ及ハス

第六章 番田惡水路

彼ノ高槻四圍ノ田野溉灌ノ爲メ丘阜ヨリ引ク所ノ水及
ヒ大塚ノ上用水引入口ヨリ入ル、淀川ノ水并ニ其地ニ
降ル雨水ト合シテ番田村ニ至ルノ水ハ頗ル大量ノモノ
トナル此水ヲシテ第一及ヒ第二号ノ潜溝樋ノ備ヲ以テ

芥川ノ底ヲ潜通セシム夫レヨリ番田川ト号ツクル惡水
路アリ其水ヲ導テ神崎川ニ達セシムルモノナリ

第七章 五位ノ庄惡水路

此ノ水路ハ番田川ニ接近シテ流ル而シテ野々宮村ノ下
方ニテ雙方相合ス五位ノ庄惡水路ハ芝生村及鮎川村ノ
近傍并ニ夫ヨリ下ノ頗ル廣キ田野ノ水ヲ決スル幹大水
路ナリ

第八章 安威川ノ爲ニ惡水阻帶ノ事

前陳ノ二水路ハ安威川下流ノ川内ニ導通ス剩サヘ其末
ハ川ノ深水路ニ合ス斯ノ如クナル故ニ二大惡水路中水
位ノ高低ハ安威川及ヒ其支川ノ流水ニ應スルモノナル
ニ由リ丘阜ヨリ出ツルノ水多クハ惡水路ノ斯ニ作用
ヲ止ルヲ判然知ルヘキナリ

斯ル位置ナルニ由リ夫々ニ大緊要ノ惡水路ハ恰モ放水ノ必用アル時ナルモ雨中ハ全ク其用ヲナサス該惡水路ヲ衝テ遙カニ逆流ヲ逞セントスル所ノ安威川ノ水ヲ遮止スルカ爲ニ第六及七号樋門ヲ閉鎖スルヲ常トス其レ此ノ樋門ヲ閉テ開カサルヲ數日ニ及フハ屢次ニシテ然ル時ハ樋門ノ上ニ溜積スル水甚タ多ク爲ニ番田ノ平地及ヒ芝生村鮎川村ノ田野ノ如キハ浸水深サ壹尺乃至四尺余ニ及ヒ譬ヒ收穫皆無ニ至ラサルモ雖モ其損失ハ甚タ大ナリ

第九章 門樋組惡水路

此ノ惡水路モ又一ノ緊要ナルモノニシテ茨木川ニ近キ上方ノ安威川ニ落ツ此ノ水路ニ籍テ放水ヲ逐クル所ノ土地ニ與フル効能ハ大抵番田川ノ番田村ニ於ケルト同

様ナリ丘阜ヨリ出水スルヲ多ケレハ此ノ水路ニ逆流シテ樋門(第三拾貳号)ノ位置ニ達ス故ニ此ノ樋門モ亦タ丘阜ヨリ到ル雨水減衰ノ時迄閉セサルヲ得ス然ルトキハ澤良宜村ノ田野ハ深壹尺乃至三尺余ノ水ニ浸サレ之レカ爲ニ收穫ノ損失亦タ大ナリ

第拾章 安威川ヲ諸惡水路ノ外ニ

離隔スルヲ必要

放水路ノ最入用ナル雨季ニアリテモ其水路ノ作用ヲ活潑ナラシメンカ爲ニハ安威川ト離間スルヲ要スト云フヲニ就キ更ニ歩ヲ進メテ論スルニハ足ラサルヘシ是レ畢竟他ノ策ニ出テハ水害減除ノ効ヲ見ルヲ得サレハナリ斯ノ言良ク當ラストスルモ今安威川内ニ開通スル所ノ惡水路ニ對シテハ必ス他ニ策ナキナリ

第十一章

安威川下流轉換

安威川ヲ分離スルノ方法ニアリ一ハ川外ニ新現ノ惡水路ヲ開設スルモノ一ハ惡水路ヲ現在ノ所ニ置キ安威川ヲ轉換スルモノ是ナリ

今安威川ヲ轉換シ其川外右側ニ新川ヲ開キ第拾貳號橫断面圖ノ位置ヨリ以下現在ノ右堤ハ新川ノ左堤トナラシムル方最得策ナルヲ發見セリ該堤ハ野々宮ヨリ味舌濱ニ至ル迄連續シ拾分ナル高度ニ築上スヘシ而シテ其堤邊ヨリ計算ニ合ヘル距離ヲ取リ全ク新タナル堤防長四拾貳丁ノモノヲ第一号圖計畫ノ如クニ築設スヘシ茨木川ノ如キ丘阜ヨリ來ル川流ハ皆此ノ新川ニ出アシメンヲ要ス

第拾貳章

新川及其上流ニ必要ノ容量

旱季ノ間ハ安威川其他ノ澗流幾ント水無シ其時ニ當テ下區(野々宮ヨリ下流)ニ流ル、モノハ唯々番田川ニ平地ヨリ來レル水アルノミ

過千八百八拾七年^{明治十年}十月八日ノ如キ尋常高水ノ際野々宮ノ上手安威川流心ノ深サ凡一丈トナレリ而シテ每一秒間過流量ハ三千百立方尺ナリ

岩佐氏ハ安威川及茨木川沿岸住民ノ曾テ觀記セシ最高水位ヲ確知セン爲メニ大ニ煩勞ノ事ヲ執ラレタリ

野々宮ヨリ上流安威川中三ヶ所ニ二回ノ極高水位ノ標点アリ其最高ナル者ハ是レ實ニ千八百八拾五年^{明治十八年}七月

中ノ頗ル危殆ニ迫リタル時ノ洪水点ナリ該洪水ノ際淀川ニハ牧方ノ破堤ヲ生シ大阪市街及ヒ其東ノ平野ニ汎

濫ヲ極メタリ

岩佐氏調整ノ横断面圖及最高水位ノ高低測量ニ依リ川ノ中央水深幾ント壹丈七尺ニシテ每一秒間通過流水量ハ八千七百六拾立方尺ナリシヲ知ル目垣邊横断面第二号水面昂上ハ左岸堤防ノ頂上ヨリ下凡二尺ノ所マテ達セシナリ斯ク高水位ヲ極メタル時間ハ何程久シト云フ
「ハ記スルモノナシト雖モ蓋シ只一時間或ハ更ニ短キモノナラン

該高水点ヲ指示セシ人或ハ故ラニ大ヲ告テ眞ヲ過ル無キヲ保セスト雖モ今其是否ニ拘ラス前顯每一秒間八千七百六拾立方尺ノ水量ハ譬ヒ安威川ノ如キ一小澗流ニシテハ聊カ過大ノ感ナキ能ハスト雖トモ先ツ之ヲ度トシテ野々宮以下ノ新川ヲ開キ安全ナル水路トナス「最

モ注意深キ方策ナリトス

第拾三章

茨木川ヨリ下流ノ容量

茨木川ニ於テモ同シク二回ノ高水即チ千八百六拾八年
明治五月及千八百八拾五年^{明治十八}七月ノ高水標点ハ澤良宜村

ニアリ先ナル者ハ此地住民ノ記憶ニ存スル高水中ノ最高ナルモノトス當時川ノ中央深壹丈五尺モアリタリ然

スルハ通過流水量ハ每一秒五千七百四拾立方尺ナリ^{安威}

木川^{安威}流水量計簿ノ際ハ流水ニ當ル障礙物ニ對シ至當ナル差引ヲナシタリ其障礙ハ彼

ノ川内高水通路中ニ樹木アリ密生セル竹林アル等ニ起因ス其狀ハ客年十二月ニ成リ

タル第一号ヨリ第六号マテノ横断面圖ヲ視シハ明瞭ナリ

茨木丘阜ヨリ流出ノ土砂ハ甚タ少シト云フヘシ其實ハ安威茨本兩川何レノ所ニモ

川底堆起ノ狀ヲ見ス唯タ下流ノ部分ニ至テ甚タ少量ノ潑澤ヲ留ムルヲ見ルニテ確知セラルハ故ニ茨木川ヨリ下方ノ新川ハ八千七百六拾ニ加ハ
ル五千七百四拾即チ每一秒間都合壹万四千五百立方尺
ノ水ヲ容ルハノ量アルヲ要ス

第拾四章

淺川及防量川ノ下方

此ノ二川ハ川底傾斜ノ度少キニ由リ幾許カ上流ニ至ルマテハ最高水位ト雖モ大出水ノ際ハ安威川ト深合ノ位置ニ於ケル水位ヨリモ一段卑下ニ立ツ故ニ斯ル時ニハ二川ノ水安威川ニ向ヒテ疏通セス然ルモハ則チ兩川トモ杜絶スルニ樋門ヲ以テスル門樋組其他ノ惡水路ノ樋門ノ如クス然レモ此ノ川ノ樋門ハ稍ヤ減水ニ趣クトキ直チニ開放スルヲ得ルモノナリ

此ノ故ヲ以テ該二川ノ爲ニ新川ノ容量ヲ増サス

第拾五章

山田川以下ノ容量

山田川ハ甚タ小ナリト雖トモ其性質茨木川ニ似タル所多シ其最高水位ノ点ハ確知シタルモノ無シ蓋シ今確知スルヲ得サルモノナルヘシ然リト雖モ味舌村ノ上第二

拾二号横断面圖ノ位置ニテ堤ノ頂上ヨリ下貳尺以内迄高水面ヲ來タシタリト仮想スレハ左ノ如キ算當ヲ得ルナリ

川流ノ横斷面積ハ

百七拾平方尺

水深ノ平均ハ

(T)

四尺三寸五分

水面ノ傾斜度ハ

(S)

〇、〇〇一五

右ノ數量ニ據リ左ノ如キ數ヲ得タリ

平均速度ハ

(M)

六尺貳寸

(毎一秒)

流水量ハ

(Q)

一千五拾立方尺(毎一秒)

故ニ山田川以下ノ新川ハ壹万四千五百ニ加ハル壹千五拾即チ毎一秒間壹万五千五百五拾立方尺ヲ最多ナルモノトシ其容量ヲ具ヘサルヘカラス

第拾六章

將來ノ最高水位

新川ノ尺度ヲ定ムルノ目的ヲ以テ我ハ新川成工後ノ流
心ニ就キ一ツノ縦斷面圖ヲ製セリ此ノ計畫圖第二号ノ
分ヲ看ラルベシ而シテ野々宮ヨリ上流安威川ノ最高水
位ハ他日ニ於テモ今日迄ノモノト同一トセリ詳カニ之
レヲ言ヘハ千八百八拾五年明治十八七月ノ高水ヲ度トスルナ
リ夫ヨリ下流味舌濱ニ至ル迄仮定最高水面ハ平等二〇、
〇〇七二ノ傾斜度ヲナシ一里間ノ落差九尺三寸三分
ナリ

該新川カ舊神奈川ニ滙合スル所ノ仮定高水位ハ曾テ吹
田ヨリ淀川ノ逆流進入ノ爲ニ起リタル最高水ヨリモ尙
少許高キモノナリ
安威川ノ出水ハ吹田邊ニ於ケル淀川ノ水高張ヲ極ムル
ノ前既ニ減衰ニ歸スルノ場合最多シトス是ハ改修ヲ加ヘタル後
ノ狀ニ就キテ言フナリ

現狀ヲ以テスレハ然ラス安威川下流ノ傾斜度甚タ緩少ナルヲ第五章ヲ看ミ并ニ大ナ
ル惡水路ニ逆流ヲ逞フスルコトハノ故ヲ以テ彼ノ丘阜ヨリ來ル所ノ流水ハ大ニ遲滯
ノナルモ其故他ナシ茨木丘阜ハ甚タ近シ淀川ノ主ナル水源
ハ甚タ遠キヲ以テナリ夫レ然リト雖モ淀川ノ洪水已ニ
吹田邊ニ到達シタルノ際安威川ノ水源地方大雨アリテ
安威川及其支川ナシテ高漲セシムルコトモ間々アルヘ
シ斯ノ事ニ豫備シ以テ此ノ計畫圖ニ示スカ如キ高キ水
位ヲ執ル事必要ナリト思惟スルナリ

第拾七章

水底ノ高低

野々宮邊及其上部ニ於ケル安威川ノ水底ハ左右ノ平地
ト大抵高低ノ差無シ間々又平地ヨリモ稍ヤ卑キ所モア
ルナリ由是觀之ハ流水面ノ傾斜度適當ナル所ナルニ何
ソ茲ニ丘阜ヨリ漂流スル土砂ノ推積アラント豫期スヘ
キノ理アラシ若シ又タ丘阜ノ草木ヲ良狀ニ存セシメハ

愈ヨ以テ砂害ノ虞ナキモノナリ、
然リト雖モ新川中ニハ漂着ノ土砂幾分カ推積スヘシ設
シ今番田惡水路ニ專用セントスル舊川底ニ於ケルヨリ
モ更ラニ急傾ノ新川底トナサベレハ漸次ニ水底ノ推起
ヲ見ルヘシ故ニ味舌濱邊新川底ハ計畫圖ニ示スカ如ク
可成的低キニ置キ最大干潮面(オ、ビイ)上拾壹尺五寸ヲ
度トセリ是ニテモ此ノ所ノ川底ニ通スヘキ潜溝樋ニ妨
碍ヲナサバルモノトス新川上端ノ底ハ同潮面(オ、ビイ)
上拾五尺ヲ度トス故ニ三尺五寸ノ落差トナル
第二号圖ニ新川底ヲ示ス且ツ新安威川ノ過クヘキ地面
ノ高サヲモ載セタリ
茨木川ノ最下部凡ソ七丁ノ距離ニハ川底ヲ深クシ現今
ノ深ヨリモ壹尺乃至貳尺五寸ニ至タラシムキモノトス

第拾八章

新川ノ堤防

當計畫ノ新堤防ハ稀レニ見ントスル最高水面ヨリ三尺
ヲ稜クノ高堤トナス(第貳第三圖ヲ看ヨ)此ノ三尺ノ余祐
ハ少許不足ヲ覺ユル程ノモノナレモ是ハ新堤眞ノ固定
ニ至リタル後ノ高サヲ云フモノナリ其他堤頂ノ幅ノ如
キハ拾八尺ヨリモ狹カラサルモノトナス故ニ後日果シ
テ豫期ノ如キ高漲アラシムニハ則チ又二尺許堤頂ヲ高ク
ナスニ容易ナルヘシ
新堤ノ両測面何レモ貳割以上ノ勾配ニ造ルヘシ新堤ヲ
營ムキハ厚貳尺ヲ超エサル土層ヲ累積築揚スヘシ其一
層コトニ馬ヲシテ周シ其土ヲ踏マシムヘシ是レ馬ハ無
智ニシテ打固木ヲ以テ搗キ固メチナス所ノ人夫カ竊カ
ニ怠ラント欲スルカ如キ情ナキモノナレハ土層堅成上

欺カル、ト無ケレハナリ
 築堤ニ適當ナル土壤ハ各所ニアリ唯タ側面ノ構成ニハ
 其最良ナルヲ擇テ用ユヘシ川流ニ當ルノ一側面ニハ良
 キ粘土ヲ掩フト少クモ厚三尺ナランヲ要ス
 深ク注意シ牢強ニ造築シ更ニ又タ最上ノ草生土皮ヲ附
 着シテ樹木ヲ植付
ヘカラス以テ防備シタル新堤トナラハ其力能ク流
 水毎壹秒間八尺以内ノ速力并ニ其壓力ニ耐ユルモノト
 ナルヘシ

第拾九章 新川ノ幅

既ニ前章(第拾貳章ヨリ第拾八章迄)ニ論定セシ數量ニ原
 ツキ今新川各所ノ幅ヲ算スルニ難カラス

○横斷面圖第拾三号ノ位置

此ノ所ハ川底幅六間アルニ由リ最大高水ノ際ハ左ノ

如キ算當ナリ

水深ハ 拾六尺三寸八分

横斷面積ハ 千百貳拾六平方尺ト貳九

土水相接線ノ長ハ符号 WP 百九尺三寸貳分

平均水深ハ 符号 R 拾尺三寸

水面傾斜ノ度ハ 符号 S ○、○○○七貳

通常ノ算式 $(V = \frac{Q}{RS})$ ナ用ユ

平均速力ハ 符号 V 每壹秒間七尺八寸三分五厘

流水量ハ 符号 Q 每壹秒間八千八百貳拾五立方尺

故ニ每壹秒間八千七百六拾立方尺ノ流水ニ對スルノ

容量トシテハ是レニテ拾分トス

○横斷面第拾五號ノ位置

此ノ所川底幅七間半ナリ

水深ハ 拾五尺九分
 横斷面積ハ 壹千百三拾五平方尺
 WPハ 百拾貳尺五寸四分
 R (符號前ニ做フ)ハ 拾尺八分
 Sハ 〇、〇〇七貳
 Vハ 七尺七寸三分五厘
 故ニ所要ノ容量ニ對シ少許余祐アリ
 Qハ 八千七百八拾立方尺
 全 每壹秒間
 〇横斷面第拾七號ノ位置
 此ノ所ノ川底幅ハ九間半ト撰定ス
 水深ハ 拾三尺八寸六分
 横斷面積ハ 千百七拾五平方尺
 WPハ 百拾九尺五寸四分

Rハ 九尺八寸六分七厘
 Sハ 〇、〇〇七貳
 Vハ 七尺六寸七分
 全 每壹秒間
 Qハ 九千拾貳尺立方尺
 故ニ拾分ノ余祐アリ
 〇横斷面第拾九號ノ位置即チ茨木川ノ直チニ下手
 此ノ所川底ノ幅チ貳拾壹間トス
 水深ハ 拾貳尺四寸四分
 横斷面積ハ 壹千八百七拾七平方尺
 WPハ 百八拾壹尺六寸四分
 Rハ 拾尺三寸三分
 Sハ 〇、〇〇七貳
 Vハ 七尺八寸四分四厘
 每壹秒間

Q ハ

全

安威川茨木川ノ合流水量ハ每壹秒壹万四千五百立方尺ヲ最大トス

○山田川深合ノ位置

此ノ所川底ノ幅ハ貳拾五間半トス

水深ハ

拾壹尺五寸貳分

横斷面積ハ

貳千貳拾八平方尺

WP ハ

貳百四尺五寸四分

R ハ

九尺九寸壹分五厘

S ハ

〇、〇〇七貳

V ハ

每壹秒間

七尺六寸九分

Q ハ

全

壹万五千五百九拾五立方尺

是山田川ヨリ出ルモノヲ加算シ合計每壹秒壹万五千

五百五拾立方尺ヲ對スルモノナリ

○惡水渠ノ直チニ上手(潜溝樋第壹号)

此ノ所川底ノ幅ハ貳拾八間トス

水深ハ

拾尺八寸七分

横斷面積ハ

貳千六拾三平方尺

WP ハ

貳百拾六尺六寸六分

R ハ

九尺五寸貳分

S ハ

〇、〇〇七貳

V ハ

每壹秒間

七尺五寸三分五厘

Q ハ

全

壹万五千五百四拾六立方尺

此ノ潜溝樋以下ノ川ハ少許廣キモノトナス

第貳拾章

新川ノ影響

安威川ナシテ新規ノ方向ニ轉流スルニ至ラハ則チ番田

川ハ其流尾更ニ貳拾丁ノ長キヲ致ス而ルノ後ハ逆流惡水路ヲ塞クノ患ヒヲ去ルノミナラス安威川ノ舊水路ハ特リ惡水路ノ用ヲナシ上方陸地ノ水ヲ迎ヘテ直ニ之ヲ神崎川ニ決セシムルモノトナルヘシ
現今ノ狀態ヲ以スレハ三箇ノ牧及鳥飼ノ惡水路ハ川水ノ浸入屢次ニシテ之カ爲ニ惡水路ノ功用最必要トスル時モ第貳拾三號ヨリ第貳拾七号ニ至ル樋門潛溝樋ハ皆閉鎖シテ守ヲサルヲ得ス然レモ安威川下流轉換ノ後ハ舊川路内第貳拾三號樋門ノ下方左測ノ小堤ヲ高ク築起スルヲ得ヘキモノトナル該堤ヲ堅牢ニナスヲ第三圖ノ第拾七ヨリ貳拾ニ至ルノ横斷面圖ノ如クスルハ前陳ノ惡水路ハ全ク川流到達ノ域外ニ立ツモノトナル然リト雖モ「サイメ」ノ上ニ在ル堰(セキ)ノミハ灌漑用水ヲ得ル

爲ニ其流出ヲ止ルノ場合ヲ除クノ外壹年間ニ凡一二回閉鎖スルヲ必要ヲ見ルヘシ
此ノ地方惡水難疏ノ狀態ハ諸村農民ノ間ニ種々ノ契約ヲ促ス所以ノ者ニシテ例スルニ第六號及ヒ第七號樋門ノ如キ其契約中ノ條款ニ依テ開閉ヲナス雨季中水位ノ昇降ハ此ノ人々互ニ爭ヒ注目スル所ノモノナリ而シテ上流ニ住スル人ハ自己ノ田地ヨリ水ヲ決スルヲ渴望スルトモ下流ノ人民カ許諾スル迄遲ツテ常トス然レモ當計畫ノ新川開設ノ後ハ該契約ノ條款多クハ無用ニ属スルモノトナルヘシ

第貳拾壹章

神崎川ニ深瀆スル新川ノ下端部

當計畫ハ新川モ番田川モ味舌濱ノ直ニ下方ニテ舊神崎川ノ深水路ニ合流スルモノトス

飛点ノ線トッテ、ラインヲ以テ圖示スルカ如ク惡水路ニ沿ヒ瀕邊ヲ過テ更ニ安威川ヲ遠達スルニ於テハ番田川ノ水路又タ半里ヲ長クスヘシ其結果ハ太雨ノ際其水路ニ安威川ノ逆流ヲ來タスノ度更ニ減少ニ至ルヘキ即チ是ナリ

神崎川改修(千八百八拾七年十二月三十日付ノ報告書ヲ見ヨ)ノ工事實施セラルヘシト想像スルニ由リ前段ニ謂フカ如ク惡水路ヲ遠達スルコトハ必要ナラスト、思フ殊ニ何時ニテモ容易ニ舉行スルヲ得ヘキノ一事ナレハ今日ノ急務ニアラス

第貳拾貳章

番田川浚渫

今ノ番田川ハ今日ニ於ケルヨリモ更ニ低キ水面ヲ備フルヲ要セス唯タ下流即チ從來ノ安威川ノ水路ハ底ノ深

淺廣狹齊一ナラス且ツ幾ント傾斜度無キニ由リ第貳第三号ノ縦横斷面ニ圖示スルカ如ク彼此所々ニ少許深開工ヲ要スヘシ然レモ其堆塞甚シキ所ト雖モ掘テ貳尺以上ニ達スヘキモノハ無キナリ

番田川改修ノ後ハ五位ノ庄惡水路ヲ會合セシムルニ第壹號圖ニ示スカ如ク第五標柱ノ所ヲ以テスルヲ得ヘシ

第貳拾三章

惡水潛溝樋ノ除去

第壹號圖ニ明示スルカ如ク陸上ノ水ヲ導キ番田川底ヲ潛テ右ヨリ左ヘ通スルカ如キコトハ無用トナルニ由リ第三拾四號及四拾九號ノ潛溝並ニ第拾八號ノ樋門トモ撤シ去ルヘシ

又タ第貳拾九號ノ潛溝樋モ其一側ヘ新惡水路(第貳拾七章ニ出ツ)ヲ設クル以上ハ撤去スヘシ

第貳拾四章

潜溝ヲ低クスル

彼ノ大ナル潜溝樋第貳拾六、貳拾七、貳拾八號ノ如キ甲ハ
三ヶ牧ヨリ乙ハ鳥飼ヨリ丙ハ一ツ屋ヨリ各々陸上ノ溜
水ヲ導キ今安威川ノ底ヲ潜リ通スルモノナレ他日(其
所ノ安威川ヲ轉換シ番田川ヲ其跡ニ導クノ後)番田川ニ
必要ナル水深ニ對シテ其潜溝樋猶高キニ過ク看ヨ第貳
拾六號溝樋中央部穴内ノ天蓋ハ最大千潮面(オ、ビイ)上
拾貳尺四寸ニ居リ第貳拾七號ノ分ハ同湖面上拾壹尺ニ
置クヲ要スルナリ故ニ兩ナカラ更ニ深ク潜伏セシメ
サルヲ得ス
第貳拾八號ノ潜溝樋ハ中央穴内天蓋同潮面上拾尺ノ高
サニアリ故ニ此ハ僅カニ低下スルヲ要ス然レモ該溝樋
朽損シテ改造ヲ要スルノ日迄其低下ヲ遷延スルヲ得

第貳拾五章

幹大惡水渠ニ水ヲ導ク從來ノ

三潜溝樋ノ容量

前章ニ謂フ所ノ潜溝樋ハ將來モ番田川ノ左方陸上ノ溜
水悉皆ノモノヲ導テ現今ノ狀ノ如ク舊川路ノ底ニ潜伏
シ幹大惡水渠ニ通セシムヘシ
抑々水量確定ノ一事ハ種々ノ理由アリテ成スヲ得ス譬
ヒ成スヲ得ルニモセヨ此ノ東京ノ如ク遠隔ノ地ニ在テ
ハ甚々難シ是レ畢竟雨量ノ外ニ淀川ノ水門ヨリ引キ入
レタル不知量ノ用水アリ且ツ低野ニ數多ノ泉アリ淀川
水高キ時殊更ニ多量ノ水ヲ噴出スレハナリ
夫レ然リト雖モ此ノ三溝樋(第貳拾六、貳拾七、貳拾八號)ノ
總容量ハ安威川下流轉換成ルヤ直チニ負擔ノ水ヲ疏ス
ルニ十分ナルモノト想フ且ツ該溝樋ヲ一段卑下ニ置ク

カ爲ニ其容量ヲ減縮スルニハ及バス
茲ニ潜溝樋ノ最狹点ニ就テ試測シ其劣小尺度ヲ舉クレ
ハ左ノ如シ

第貳拾六號潜溝樋

頂上ノ幅ハ

八尺

底ノ幅ハ

七尺五寸

深ハ

六尺

故ニ横斷面積ハ

四拾六平方尺半

第貳拾七号潜溝樋ハ

頂上ノ幅

拾尺四寸

底ノ幅

九尺

深ハ

五尺五分

故ニ横斷面積ハ

四拾八平方尺ト九八八

第貳拾八号潜溝樋

幅ハ

七尺

深ハ

六尺

故ニ横斷面積ハ

四拾貳平方尺

合計斷面積ハ

一三七、四八五平方尺

右溝樋ノ長サハ甲ハ四拾間乙モ四拾間丙ハ三拾間ナ
リ

第貳拾六章

新設潜溝樋第壹號

前章ノ潜溝樋ヲ通過スル所ノ全水量ハ都テ四丁許ナ下
テ後チ壹点ヨリ新川ノ底下ヲ潜リ一方ニ出テシム其所
ノ新川ニ就テ算定ノ底幅ハ百六拾八尺ニシテ高ハ最大
干潮面上拾壹尺五寸ナリ此所ニ限リ特別牢強ニ築堤ナ
ナサハ堤側面ノ勾配二割トナスヘキヲ壹割半ニ變更ス

ルヲ得而シ長四拾五間ノ一溝樋ヲ用テ足レリ芥川底下ノ潛溝樋ハ各々長五拾八間及五拾九間ノモノナリ是レ第壹號及第貳號圖ニ潛溝樋第壹ト號ツケテ示ス所ノモノナリ上端溝底ノ高サハ最大干潮面(オ、ビイ)上五尺五寸下端溝底ハ全潮面上五尺ニ在ルヘキモノトス溝樋内空間ノ高五尺其中央縦ニ隔障ヲ入レテ二溝ニ分ツ各一溝内ノ幅ヲ拾四尺トナスヘシ故ニ横斷面積ハ百四拾平方尺(一四ニ乗スルニ五ト二ヲ以テス)トナル是レ從來ノ三溝樋横斷面積ノ總數ヨリモ少許大ナルモノナリ斯ク三溝ニ易フルニ二溝ヲ以テスルノ益ハ長サニ増加アルノ損ヲ償フテ猶ホ余リアリ故ニ其容量ハ更ニ大ナルモノナリ

前段ニ謂フ所ノ尺度ニテ十分ノト思惟ス是レ愈ヨ然ルヘシ何トナレハ第三拾四及四拾九号ノ潛溝樋ヲ經テ

三箇ノ牧惡水路ヨリ此ノ方角ニ來ルノ水ハ他日他ノ方向ヲ取テ流ルヘキカ故ナリ(第貳拾三章ヲ看ヨ)

新設スヘキ此ノ潛溝樋ハ川水到達ノ域外ニ在ルカ故ニ閉鎖ニ備ルノ門扉ヲ要セス

溝渠長九拾間ノモノ壹條ハ第貳拾八號潛溝ヨリ水ヲ導テ此ノ新潛溝ニ至ルカ爲ニ掘開ヲ要ス

第貳拾七章 右測ノ新惡水路

島村ノ平地及鶴野村ノ田野ヨリ落ツル陸地ノ水ハ今圓轉迂回ノ路ヲ取テ味舌濱ノ幹大惡水路ニ出ツ其途中潛溝樋ヲ通シテ安威川ヲ潛リ右ヨリ左ニ出テ其下流再ヒ他ノ潛溝樋ヲ通シ同川ヲ潛リ左ヨリ右ニ出ツ又タ一ノ不利トスヘキハ此水三箇ノ牧惡水路ニ合シテ引導セララル、卽是レニテ該惡水路ハ自己ノ水源ヨリ既ニ已ニ

十分ノ水ヲ負擔スル所ノ者ナリ
今提出ノ計畫ニハ新川ノ右側ニ接シ一ノ新溝ヲ開通シ
而シテ以テ新潜溝樋第壹号ノ直下ニ於テ幹大惡水渠ニ
合流セシムルノ趣向ニ附シタリ
此ノ新溝ハ丘阜ヨリ出ツル諸川及門樋組惡水路ノ下ヲ
潜リ過クルニ計畫圖ノ如ク新規ノ潜溝樋第貳號、三號、四
號ヲ以テスヘシ該新溝ノ深サハ第貳號及第三號圖ニ記
載ノ如クナルヲ得溝ノ幅ハ上方ニテ四間下方即味舌濱
ニテ六間アノハ事足ルヘシ
斯ク直水路ヲ開ケハ唯々島村ノ平地及鶴野村ノ放水容
易ナルノミナラス味舌村ノ卑地ニモ又々同効ヲ及ホス
モノナリ

第貳拾八章

第貳號ヨリ第四號迄ノ新設

潜溝ノ尺度

新設スヘキ此ノ潜溝樋内通水積ハ從來ノ水路ニアル潜
溝及樋門ニ於ケルモノヨリモ小ナラサルヲ度トス是レ
十分大ナリト想像スルニ余リアル者ナリ斯ノ容量ハ實
際八用ナルモノヨリモ稍ヤ大ニ過ク然レモ之カ爲ニ何
等ノ不利モアルヲ無シ其尺度ヲ減シタリトテ工費ノ差
異ハ些少ナルヲトス此ノ地方ニテ通常ノ木樋幅及高各口六尺アルモノナラハ長一間コトニ凡金七拾圓ノ費用ニテ得ラル、ト云フ
上ヨリ順ヲ追テ之ヲ云ヘハ先ツ門樋組惡水路ノ下ヲ潜
リ通スルモノニシテ即チ新規ノ潜溝樋第四号ナリ其長
七間半幅ヲ八尺四寸高ヲ三尺五寸トス故ニ横斷面積貳
拾九平方尺十分四トナル是レ今島村ノ水ヲ導テ三箇ノ
牧惡水路ニ送ル從來ノ潜溝樋第三拾四號ノ大サニ全一
ナルモノナリ其溝底ハ最大干潮面(オ、ビイ)上七尺ノ高

サニ置クヘシ然スレハ余アル程ニ低クシ譬ヒ他日門樋
組水路ニ更ニ壹尺ノ深ヲ増ストアリト雖ヒ尙妨ケナシ
第三號圖中三拾號橫斷面ニ示カ如ク新潛溝樋第三號ハ
茨木、淺、防量ノ三川底下ニ潛通スヘキモノナリ其長四拾
四間ナリ溝内幅ハ拾壹尺壹寸五分高ハ四尺五寸即橫斷
面積五拾平方尺一七五ナリ是レ第四號ノ新溝樋及第三
拾及三拾壹號ノ在來樋門ノ橫斷面ヲ合算シタルニ全シ
此ノ第三號ノ溝底上端ハ最大干湖面上七尺下端ハ六尺
八寸ニ置クモノトス
新潛溝樋第二號ハ山田川ノ底下ニ横タフヘキモノニテ
其容量ハ同第三號ノ分舊來ノ潛溝樋第二拾九號ノ分ヲ
合一シタルニ等シキヲ要ス貳拾九號ノ最小部分ニ就テ
測レハ其溝内幅六尺五寸高三尺五寸故ニ其橫斷面積ハ

二十二平方尺ト四分三ナリ依テ左ノ如ク算ス

舊第二拾九號ノ分ハ 二二、七五 平方尺

新第三號ノ分ハ 五〇、一七五 平方尺

合計 七二、九二五 平方尺

故ニ第二號新潛溝樋内幅ヲ十六尺二寸高ヲ四尺五寸ト
スレハ其橫斷面積ハ七十二平方尺十分ノ九ニ當ル溝底
ハ最大干湖面上六尺五寸ニ置クベシ

第二拾九章 門樋組惡水路

此ノ惡水路ハ川右ノ首大ナルモノナリ其長壹里半ニ余
レリ而ソ鶴野村ニテ現今ノ安威川ニ出ツ茨木町ノ上ヨ
リ島村ニ至ル迄安威茨木兩川間ノ惡水皆ナ之ニ歸飛ス
此ノ水路ハ樋門ヲ設ケテ(圖ニ示ス第五號)新川ニ導クモ
ノトナスヘシ該樋門ノ通水積ハ大底第三拾貳號ノ舊樋

門ニ等シキモノタルヘシ是レ凡ソ門穴ノ幅十二尺高十尺アルニテ足レルナリ

從來ノ門樋組ノ樋門ハ用水ヲ堰上スルノ目的ヲ以テ存在セシムルモ可ナリ

新設樋門ハ今ノ門樋組樋門ノ如ク川水高キ時閉鎖スルヲ要ス但シ安威川ノ水底上凡ソ四尺五寸以上ニ高漲スル時ニノミ限ルト知ルヘシ改修シタル新規ノ状況ヲ察スレハ彼ノ丘阜ヨリ出ル所ノ水ハ今日ニ於ケルカ如ク阻滯セラル、トナシ故ニ新樋門閉鎖ノ時間ハ今ノ舊樋門ノ閉鎖時間ヨリモ瓊ニ短キモノトナルヘシ
前段ノ新樋門ノ築立ヲ避ケント欲セハ該水路ヲ導テ番田川ニ落合セシムルヲ得ヘシ或ハ又タ新惡水路ニ導テ味舌濱ヨリ下方ノ幹大惡水渠ニ達セシルヲ得若シ此ノ

末節ノ策ニ出ツレハ決水ノ効最完全ナルハ論ヲ俟タスト雖門樋組ノ水路ニハ時々多量ノ水アルカ故ニ若シ菰江村ニ至ル迄惡水渠ノ容量一層濶大ナラサル以上ハ他ノ惡水路ニ妨害ヲ與フヘシ然リトテ斯ノ惡水渠ヲ濶大ニセンニハ經費甚タ大ナルヘシ

第三拾章 味舌濱以下ノ幹大惡水渠ノ幅

余ハ既ニ味舌濱以下ノ幹渠ニ流レ入ラシムルモノハ諸方ヨリ通スル惡水路中ノ何レナリト云フヲ決定シタルニ由リ該幹渠ノ尺度ヲ定ムルニ難カラス夫レ最モ少ク算スルモ渠底ノ幅ハ十間無カル可カラス而シテ兩側斜面勾配ハ二割トスルナリ
逐次下流ニ至レハ吹田ヨリ上下ニ於ケル諸水門ヨリ落加スル所ノ水量ニ應シ該渠ノ幅漸ク廣キヲ要ス

前段ニ謂フ所ノ幅ハ渠内ノ隔流小堤及ヒ障碍物ヲ撤去
シ一掃シタルモノトシ且ツ將來低水ノ深サ二尺五寸ト
想定シテ以テ言フ所ノモノナリ(淀川下流改修第拾八號
圖ヲ見ヨ)

第三拾壹章 用水路ニ及フ影響

前陳惡水路ノ改修ヨリ灌溉用水路ニハ何等ノ利益ヲ與
ヘサルヘク且ツ却テ不利トナルコナキニシモアラス然
リト雖モ卑野ニ灌クノ方法ハ常ニ容易ナルモノナリ或
ハ一方ヨリ用水引入上少許ノ困難ヲ生センカ然ルモハ
他ノ一方ヨリ多ク引入スルヲ得ベク或ハ旱魃中一時惡
水ヨリ出ツル所ノ水ヲ堰上シテ得ラルヘシトス
岩佐氏調査ノ圖面ニ據レハ三拾七ヶ所ノ用水引入口ア
ルヲ觀ル其溝通ハ都テ水制ノ方筒ニシテ至テ少ナルモ

ノナリ就中最大ナルモノト雖モ五平方尺ニ足ラサル門
穴ヲ有スルノミ多クハ一尺平方以内ノモノナリ今此ノ
計畫ヲ行テ其効用ニ影響ナキ用水門ヲ舉レハ左ノ如シ

番田川ニ

第壹號ノ只一ヶ所

安威川上流ニ

第四號ヨリ第七號マテ

門樋組惡水路ニ

第八號ヨリ第拾四號マテ

并第拾六號

安威川左測ニ

第拾五號及第拾七號ヨリ

貳拾三號マテ并ニ貳拾五號

貳拾六號

防量川ニ

第三拾號

然レモ第貳拾八號(二、二七五平方尺)及ヒ第三拾壹號(四、一
二五平方尺)第三拾六號(四、五平方尺)第三拾七號(四、五平方尺)

ノ用水門ハ其効用ヲ失フヘキモノナリ且ツ總テ他ノ用水
水引入口ニ於テモ水位一段低キモノトナルヘシ
番田惡水路中例令ハ味舌濱及野々宮村邊ニ水堰ヲ備レ
ハ五位ノ庄惡水路ニ至ル迄モ十分高ク水面ヲ止騰セシ
ムルヲ得テ第貳號、三號、貳拾四號、貳拾七號、貳拾九號及ヒ
三拾貳號ヨリ三拾五號迄ノ用水引入口ハ從前ノ如ク其
用ヲナスナリ而シテ該水堰ハ雨フル時ハ拔キ去ルヲ得
ヘキ所ノ板製ノ單形堰ナルヘシ旱季中一時ノ土堰ヲ川ニ横築シテ
水ヲ止ムルコトハ農夫カ常ニ爲ス所
ニシテ神崎川ノ下流ニハ蓋シ今モ猶此ノ習慣ハ止マサラントスレモ斯ル所爲ハ決シ
テ許可スヘキモノニアラス尙ホ我レ過クル明治二十年四月十八日付捧呈淀川ニ係ル
報告書第八拾
五葉ヲ看ヨ

第三拾貳章

施行ノ順序

今此ノ惡水排除ノ計畫ヲ實行スルニ當リテハ既ニ二年
前及ヒ明治二十年十二月中ニ提出シタル味舌濱以下ノ

新規ノ幹大惡水渠開達工ノ施行ハ避クヘカヲサルモノ
トナル今茲ニ提出ノ計畫ニ係ル工事ハ先ツ四ヶ所ノ新
設潜溝及門樋組ノ新樋門井ニ右側ノ新惡水路ノ築成開
設ニ着手スヘシ次ニ新規ノ安威川ノ堤防ヲ味舌濱ヨリ
築起シ彼ノ野々宮ニ於テ今ノ安威川ヲ此ノ新川ニ接續
スルノ前既ニ新川ノ工事ヲ落成セシムルコト肝要ナリ
丘阜ヨリ出ル流水新川ニ入テ通行スルノ後チハ直ニ第
貳拾三號ノ水門ヨリ以下安威川跡舊水路ノ小堤ヲ高築
スルヲ得而ル後卑地ノ狀態ハ此計畫ノ工事中殘餘ノモ
ノ即チ番田川浚渫ノ如キモノ等ハ更ニ急クニ足ラサル
迄ニ改良ヲ見ルニ至ルモノナリ

第三拾三章

工費

工費ノ豫算ハ此ノ書ニ附セス其レ他ナシ尙ホ良ク實地

ニ就キ詳細ナル物價ヲ確知センコトヲ要スレハナリ
既ニ陳述セシ辨解ト第壹、貳、三號ノ繪圖トニ據ラハ全体
ノ工事十分ニ判然ス然ルヲ以テ大阪府員ニ於テ其工費
ノ精密ナル豫算ヲ立ツルニ勝ユヘキナリ
前文第貳章ニ謂フ所ノ事件ヲモ算入シテ云ヘハ抑モ此
工事タル果シテ適當ナル施行ヲナサハ一ノ大利アル企
業ナルヲ我ハ毫モ疑ハサルナリ思フニ又タ斯ル工事ハ
政府ヨリ補助金ヲ仰クノ必要ナキモノナリ

第三拾四章

備考

當計畫ノ趣向ハ門樋組惡水及ヒ淺川防量川ハ皆新川ニ
放ツモノトス甲ハ一ノ水門(第五號)ヨリシ乙丙ハ皆直接
ニ放ツナリ
譬ヒ前段ノミ水流ニ出ツル所ノ惡水路ハ太雨ノ季中時

々安威、茨木兩川ノ高水ニ塞カレテ通セスト雖モ改修後
ハ其停滯ノ時間今日ニ於ケルヨリモ瓊カニ短キモノト
ナルヘシ然レモ霖雨連日滂沱タルトキハ樋門第三拾貳、
三拾五、三拾六、三拾七號ヨリ上ニ位スル最低ノ濕地ハ或
ハ暫時溢水ノ爲メニ浸サルヘシトス故ニ此ノ所ハ都テ
他ノ地ニ比スレハ除害ノ効全カラス
前顯甲乙丙ノ三水路ハ新川ニ合流スルノ姿ヲ一變シ之
ヲ安威川移轉後ノ川跡(他日番田川)ニ導テ以テ他ノ妨モ
無ク且一層放水モ宜シキヲ得ルノ策アリ此ノ策ニ出ツ
ルノ場合ニ在テハ二大潛溝樋ヲ新川ノ底ニ埋伏セシム
ヘシ其一ハ長凡ソ四拾間アルモノヲ用井門樋組ノ水路
ニ充ツ(第貳拾九章ノ第五樋門ニ換ルモノ)又ハ長凡ソ五
拾間アルモノヲ用井淺川防量川合一ノ水路ニ備フ當計

畫ヲ前段所陳ノ如ク修正スル一條ニ就テハ唯タ工費ノ
加ハルアリト云フノ外別ニ異論アルヲ見ス然リト雖モ
曩キニ試ミタル高低測量ニ據テ之ヲ觀ルニ斯ル修正
ハ甚タ緊要ナルモノニアラス
以上

西曆千八百八拾九年^{明治}二月廿三日於東京

內務省雇工師

ヨハチス、デレエケ識

內務屬宮原直堯譯

明治廿二年七月二十日

印刷者 茨木村吉田常三郎